

書評

岩波哲男著『ヘーゲル宗教哲学の研究——ヘーゲルとキリスト教』(本文、八一頁。凡例、目次、あとがき、付録等二三頁。人名・事項索引一八頁。参考文献九頁。創文社、昭和五十九年刊。)

氷見 潔

本書の執筆の抑々の出発点は、著者によれば、「哲学する人間にとって信仰は可能であるのか、神学する人間にとって哲学は可能なのか」という、「単純明快な」疑問であったという。キリスト教的背景のない日本の大学に於て、哲学しようとする者は神学を軽んじ、逆にまた、敬虔な信仰者にして神学を志す者は、哲学を蔑視するのが常である。こうした一般的風潮に対して、著者は一学究として長らく強い不満と疑念とを懐きつづけ、両者の綜合の可能性を摸索しつつあった。そして、とうとうヘーゲル哲学のうちに、すぐれた綜合・和解の例を見つけ出すに至ったのである。本書は、そうした探究成果を遺憾なく披露するものである。すなわち著者は、ヘーゲル宗教哲学についてのこの論述を通して、信仰乃至神学と哲学との結びつきの在り方を、広く世に示そうとするのである。

さて、ベルリンに於けるヘーゲルは、一八二一、二四、二七、三一年という四度の学期にわたって、くり返し宗教哲学の講義を行なった。しかるに二一年の講義にあたってヘーゲルが作成した草稿は適宜加筆されて、以後の講義にも利用される。この草稿および各年度の講義に於ける若干の受講者の筆記が資料となつて、ヘーゲルの死後『宗教哲学講義』が編集・刊行された。その際の編集方法の相違によつて、今日私たちは、二種の異った版を手にすることになる。一つは、マールハイネケ・パウアー版であつて、これは、一八三二年にマールハイネケが主として最後の講義の記録に基づいて急ぎ編集して全集に収めたのを、一八四〇年にブルーノ・パウアーが改訂したものである。このときパウアーは、ヘーゲルの草稿および受講者の筆記を幅広く利用することによつて、初版を大幅に増補した。グロツクナーの全集版は、これの復刻であり、最近のズールカム出版社版も、概ねこれに基づいている。これに対し、もう一種類は、ラッソン版(一九二五—一九二九年)である。ラッソンは、パウアーの方針を批判しつつ、自らはあくまでヘーゲルの草稿に依拠することを標榜した。そして草稿の順序を決して動かすことなく、他の資料から適宜これに挿入するという仕方、編集を成し遂げたのである。

こうした事実から、私たちは、ヘーゲルの宗教哲学を論じようとする場合、与えられたテキストへの批判・吟味という課題

を避けて通ることはできない。パウアー・グロックナー、ラッソンの両版に対し、等しく批判的態度を保持しつつ、必要に応じて比較対照を行ない、総合的な見地からヘーゲルの講義の輪郭の再現を試みる、ことが、研究者に要求されるのである。本書の著者の場合には、グロックナー版を骨子としつつ、ラッソンの版にも十分顧慮を払い、特にそこに明示されたヘーゲル自身の草稿の部分を重視するという方法をとる。そして両版の著しい相違点については、それが特に重要と認められる限り、比較検討を試みるのである。

二

ところで、グロックナー版によれば、『宗教哲学講義』には、まず緒論があつて、ここでおよそ宗教哲学の何たるかが論じられる。次いで、本論は、宗教の概念、規定的宗教、絶対的宗教という三部に分かれる。すなわち、そこに於てヘーゲルは、まず宗教の本質的概念規定を明らかにし、次いで宗教の歴史的現象形態を叙述し、然る後に、歴史的形態が概念との最終的な一致に到達した段階としての、絶対的宗教すなわちキリスト教を論じているのである。こうした全体的構成に関する限り、ラッソン版も特に異なるところはない。本書の著者も、本論の部分を、グロックナー版とまったく同じ標題によつて三部に区分し、ヘーゲルの講義内容を順次詳細に解釈・検討してゆこうとしている。(ただし、本書の場合、第一部は、講義の緒論の部分をも包含している。つまり著者は、第一部前半(第一章)に於て、まず、

「ヘーゲルにおいて宗教哲学がどのような意味をもっているかを明らかにし、それによつて宗教と哲学との関係、信仰と理性との関係を「彼が」どう考えていたかに言及する。」そして、この問題に関し、ヘーゲルとの批判的対決に一応の決着をつけたうえで、同後半部(第二章)に於て、著者は宗教の概念に関する考察にとりかかろうとするのである。)

第一部前半の論述では、信と知との分裂・対立の關係の解明に力が注がれる。それというのも、著者の着眼によれば、ヘーゲルは近世に於ける信と知との深刻な分裂の只中に身を置き、これを明確に認識しつつ、しかも両者の和解・綜合の成立点に自らの宗教哲学の根底を位置づけているからである。従つて、著者としては、まず両者の対立關係の詳細な究明が、ヘーゲル宗教哲学の根本的性格を理解するために不可欠の前提であると考へているのである。著者は、まず、信と知との対立という問題に関する思想的背景に遡及し、さらにヘーゲル自身の青年時代に於ける・この問題との取り組みの成果である論文『信と知』の内容に言及することによつて、ヘーゲルの時代には、この問題は如何なる様相を呈するに至つていたのかを説明する。そのうえで、著者は、ヘーゲルが両者の峻厳な対立關係を踏まえながらも、「精神は統一態であり、ただ一つの理性のみが存在する」という最高原則のもとに、両者の和解を達成せんとしていたのだ、と論ずる。「和解」とは、著者によれば、「相対立する二つのものが、その区別を見失うことなく同一性を回復すること」である。ヘーゲルの思索のまさにそういう在り方のう

ちに、著者が、自ら冒頭に提出した根本的問いに対して、一つの鮮明な解答を見出しているのであることは、言を俟たない。なお、著者はまた、この問題に因んで、ヘーゲルを念頭に置きつつ、H・ゴルヴィッツァー、W・ヴァイシエデルという二人の著名な現代の神学者間にかわされた議論を紹介している。これは、現代に於ける学界の動向を知るには、興味深いものである。

第一部後半は、宗教の概念をとり扱う。これに該当する講義の部分は、グロククナー版では、神、宗教的關係、儀式の三項目に分かれている。ここに於てヘーゲルは、まず絶対者の根本的性質を説明し、次いで絶対者と人間との結びつきとしての宗教を、さらにこの結びつきの確証としての儀式を逐一論ずるのである。ラッソン版は、これとはかなり異った構成になっているが、著者は、前述のとおり、グロククナー版に基づきながら、ラッソン版をも必要に応じて顧慮するという仕方、論を進めている。

まず著者は、ヘーゲル独特の神観の解明に力を注ぐ。そして、よくなされる「汎神論」という評価に関しても、諸研究者の説を紹介しながら、決してヘーゲルの神観が普通の意味での汎神論につながるものでないことを明らかにする。次いで、宗教的意識の諸形式に関する考察に進むが、ここでは特に、ラッソン版との相違点についての記述が目される。グロククナー版では、宗教的意識は、感情、直観、表象という形式をとって進展するものと説明されているが、そこで感情 *Gefühl* という語に

まとめられたものは、もともとヘーゲルの草稿では、感覚 *Empfindung* であったという。そこで著者は、ラッソンを支持しつつ、感情と感覚との区別を見失ったバウアーIIグロククナーの編集の欠陥を指摘する。そしてヘーゲルに於ける両語の用法について、独自の考察を加えている。また儀式を論ずる箇所では、著者は、ヘーゲルが儀式の成立基盤として国家共同体を重視している点に着眼し、『法の哲学』『エンチクロペディ』に見られる国家観にも言及しつつ、ヘーゲルに於ける宗教と人倫的共同体との関係についての考察を進めている。

第二部「規定的宗教」では、キリスト教以外の歴史的諸宗教がとり扱われる。歴史を概念の実現過程として捉える以上、ヘーゲルは、『宗教哲学講義』に於ても、いったん宗教の概念を確立したからには、続いてその実現過程としての宗教発展史の叙述にとりからざるをえない。この部分は、グロククナー版では、自然宗教、精神的個別性の宗教という二節に分かれる。前者では、ヘーゲルは、魔術から始めて中国宗教、インド宗教、仏教、ペルシア、シリア、エジプトの宗教という順に考察を進め、後者では、ユダヤ、ギリシア、ローマの宗教を考察している。発展の最終的到達点は、概念の完全な実現としての絶対的宗教にはかならないから、第二部はまた、キリスト教成立の前史という性格をもつことになる。

ヘーゲルによるこうした宗教史の扱い方に関しては、自らの哲学説の検証への積極的意欲が評価される半面、一方では恣意的構成が批判され、また当時における実証的研究の発展程度の

低さによる制約も、しばしば指摘されている。著者も、そうした事情を十分に念頭に置いて論述を進めている。すなわち、基本的には、キリスト教の前史という性格づけのもとに、第二部全体を一貫して見通しつつ、同時に個々の宗教に関するヘーゲルの所説を、実証的宗教史の見地から、順次詳細に吟味してゆくようにするのである。特に、R・ロイツェの研究書 *Die ant. erchristlichen Religionen bei Hegel* を多く利用することによって、著者は、中国やインドの宗教および仏教に関するヘーゲル当時の研究状況を述べ、具体的に如何なる研究文献をヘーゲルが利用し得たのかということをも、明らかにしている。特に中国の宗教については、ラッソン版は、これを魔術宗教の一様式として従属的に位置づけ、「度量の宗教」としてこれに独立の位置を与えているグロックナー版との間に相違を示しているが、この点に関し、著者は、ロイツェを援用しつつ、ラッソン版を批判している。また「精神的個性の宗教」中、ギリシアの宗教は、『精神現象学』に於て「芸術宗教」の名のもとに大々的に論じられたものであるが、著者は、その内容にも言及することによって、『講義』に於けるヘーゲルのギリシア宗教観との対照を浮き出させている。

第三部「絶対的宗教」は、宗教の完成形態であり、そこに於て私たちは、「ヘーゲルの宗教哲学についての見解が頂点に達するのを認める」と、著者は述べる。換言すれば、青年時代からヘーゲルの主要関心事であった・宗教と哲学との内的関連の問題に関して、ここで総決算がなされている、というのである。

そうした認識に基づいて、著者は、この部分の総論に於て、キムメルを援用しつつ、青年時代から『精神現象学』、『大論理学』を経て『エンチクロペディ』に至るヘーゲルの宗教観の発展を概観する。そして、これとの関連に於て、『講義』に見られる絶対的宗教の基本的特徴を把握しようとする。その結果、(1) 啓示宗教、(2) 啓示された宗教、(3) 真理と自由との宗教という特徴点が、とり出されてくる。このような概括的把握をなしたうえで、著者は、次に絶対的宗教の内容は三位一体論にはかならないということを論じ、「父の国」、「子の国」、「霊の国」というヘーゲル独特の三一性論の考察へ進んでゆく。

三

以上のように、本書は、ヘーゲルの講義全体の内容を、順を追って辿っている。この叙述を通して、著者は、「ヘーゲル哲学全体に占める彼の宗教哲学の重要な位置づけ」を、一貫して明確化しようと努めている。同時にまた、そこに於て、『宗教哲学講義』が「単に宗教の哲学であるにとどまらず、宗教史でもあり、宗教学でもあり、また結局のところは哲学自体でもある」ということが、明らかになってきたと、著者は述べている。つまり、ヘーゲルの講義は、一方に於て宗教史、宗教学としての実証的性格を強くもつとともに、他方また、絶対的宗教の三一性論に於ては、哲学体系そのものに等しい内容をとり扱っている。この点についての著者の明確な認識が、本書の結論として語り出されているのである。

まさしく著者の主張するとおり、元来『宗教哲学講義』は、円熟期に於けるヘーゲルの宗教論の大成として、きわめて高い位置にあるものといえよう。にもかかわらず、これをとり扱う研究は、従来比較的少なかった。講義の全体を、部分ごとに順を追って逐一解釈・検討してゆく試みに至っては、例を見なかったといつてよい。そうした状況には、主として二つの原因があったと考えられる。第一には、宗教哲学という研究対象は、これに取り組もうとする者に、宗教と哲学との両領域にわたる人並みはずれた広い視野を要求するものであること、第二には、講義草稿と受講者の筆記とをもとにして編集されたという事情からくる・テキストの不確実性が、研究者に二の足を踏ませたということ、である。そういう現在までの経過であつてみれば、今回、講義の全貌が、信仰と哲学との和解・綜合を真摯に探究しつづける著者によつて、慎重なテキスト批判の手續きを経つて解明されたことは、その先駆的意義という点に於てきわめて高く評価されるべきであらう。

本書に於て、著者は、実に多数のヘーゲル研究文献を参照・引用している。そして、当然のこととはいえ、部分毎の題材に応じ利用する文献を使い分けるといふ点に於て、鮮かな手際を示している。例えば、第三部「絶対的宗教」中、「父の国」の節では、J・ハッセンの「Hegels Trinitätslehre」や、J・シムントの「Die Trinitätslehre G. W. F. Hegels」を利用することによつて、内在的三性を論じ「子の国」では、J・リングレーベンの「Hegels Theorie der Sünde」を利用して、

キリストの贖罪による神と世界との和解の問題を論じ、「霊の国」では、H・シャイトの「Geist und Gemeinde」を利用して、霊の共同体たる教団の問題をとり扱うという具合である。このように多様な文献を幅広く適切に利用することによつて、著者の論述は、非常に客観的な、説得力に富んだものとなつているといえよう。

また、テキスト批判の問題に関しては、パウアー・グロックナー版を基礎にして、必要に応じてラッソン版をも顧慮するという著者の方針は、妥当なものといふことができる。ラッソンの編集は、もともと読解のむずかしい草稿を根底にして、そこに種々雑多な材料を挿入したために、思想展開に関して、パウアーの版以上に見通しのききにくいテキストを作り上げてしまつてゐる。従つて、現時点に於ては、ズールカムプ社版の編集者の述べるとおり、「宗教哲学講義の本当に信頼できる版を呈示するという課題が解決されていない限り、一八四〇年の版は、凌駕されてしまったものと看做されるわけにはゆかない」のである。こうした現状からいって、著者のとつた方法は、講義の輪郭の再構成という目的の達成のための、標準的な態度を指し示しているといつてよい。

四

以上のように本書は、全体としてきわめてすぐれた成果を示す研究書である。このことを十分に心に銘じたいので、次に、なおあえて二、三の批判点を記しておきたい。

まず第一に、全体の構成に於て、本書はあまりにもヘーゲルの講義自体の区分・配列にとられすぎている嫌いがある。標題までグロククナー版とほぼ同じものを用い、講義の進展にまいったく歩調を合わせて、逐一考察を進めてゆくという方法がとられているため、結局全体として本書は、ヘーゲルの講義のひとつのパラフレーズに終始しているという印象が強い。無論、各部分について見れば、先述のとおり諸研究者の説が適宜紹介されることによって、講義の趣旨が敷衍され、すぐれた注解が与えられている。しかし、率直に言つて、読者としては、著者自身の視点から独自の思想的言語によつて大胆に咀嚼され消化されたヘーゲルをこそ、見せてもらいたかつたのではあるまいか。既述のとおり、著者をしてヘーゲル宗教哲学の研究に向かわせた根本的動因は、信仰と哲学との対立に関する著者自身の主体的問いであつた。本書の論述に予めしつかりした統一性を与えるためには、著者は、この点をまず序論乃至総論的に、もつとしっかりと説明するべきであつたと思う。たとえば、宗教的信仰と哲学的思惟との対立の様相を、まずもつて著者自身の思索体験に基づいて、自身の言葉でもつて説明して見せ、この基盤の上に立つて、西洋思想の伝統に於けるこの問題の展開の様子を瞥見し、さらにヘーゲルをこの伝統内に位置づける。そのうえで、かれの宗教哲学の「和解」的な根本性格を大胆に大掴みにして示す。およそこういう筋道でもつて、著者自身の主体的意図と研究対象たるヘーゲル宗教哲学の根本的特徴とを明確に結びつけることを試みるならば、そこには自ずと、研究に

よつて説明されるべき問題点が、予めいくつかしぼり出されてくるはずである。そのことに応じて、論究の構図が描き示されて然るべきであつたように思われる。

だが実際には、著者は、そうした総論的論述にあたるものを、既に見られたとおり、本論第一部の前半に押し込むことによつて、きわめて控え目な内容にしてしまった。そこには、信と知との対立が論じられているとはいつても、著者自身の思索体験に基づく論述は寡なく、また西洋思想の伝統的背景の考察は、もつぱらE・シュミットの研究書を準拠としている。さらには、ヘーゲル自身のこの問題に対する態度を論ずるにあつても、イエーナ期の論文『信と知』の内容の紹介に紙数が多く費され、これとは年代上かなり隔つている肝心の『宗教哲学講義』との連関は、一向に明らかにされない。そしてこの状態のまま、著者はすぐに、ゴルヴィツァー、ヴァイシエデル間の議論の紹介に移るのである。こうした展開では、論述全体の構想はなかなか読者に明らかになつてこないのではないか。あたかも、見通しのないままに講義の本論に取り組み、講義そのものに頼りきつて、その歩みに従つて部分的注解を重ねているかのごとき印象を受けざるをえないのである。

第二に、著者がきわめて多くの研究書を引用・紹介し、また当面のテキスト以外のヘーゲルの諸著作にも多く言及している結果、それに伴う弊害の一面をも、看過することはできない。というのは、ともすればそうした第三者(ヘーゲル自身の別の著作をも含んだ意味で)の判断への依存が目につくし、さらに

場合によつては、それらへの言及がかえつて脱線的作用を及ぼして、前後の脈絡を捉えにくくしているように思われるからである。前述の『信と知』への言及にしても、それと『宗教哲学講義』との関連が説明されないままに放置されている以上、逸脱の顕著な一例になりかねないであろう。

他にも一、二挙げてみるならば、まず第一部第二章「宗教の概念」中、「直接知」を考察する箇所、突如「主観—客観関係」についてのハイデガー的論議が挿入されてくる(二六五—二六八頁)。その内容自体は、なるほどハイデガー自身、ヨーロッパ思想の数千年来の大問題として考えているものに違いないが、しかし、ここでことさらに引き合いに出される必然性を、読者はなかなか理解することができないであろう。また、同じ第一部第二章中、「宗教的意識の諸形式」のうち「表象」を論ずる箇所での「歴史」に関する論述(二四五—二五五頁)も、読者の目には大きな脱線と映り得る。元来、講義そのものが当該箇所にて明らかにしようとしているのは、意識形式としての表象というものの意味であり、歴史もまた、その「出来事」という性格のゆえに表象の領分に属するということが、述べられてはいるにすぎない。しかるに著者は、「歴史」という語をことさらに捉えて、たちまちヘーゲルの歴史哲学についての大々的な考察に立ち入る。そして『歴史哲学講義』や『エンチクロペディ』を引用し、トイニセンやキュングの説を紹介している。著者のこうした態度によつて、読者は、完全に講義の脈絡から引き離されて、広大な歴史哲学の領野の中を引き回されること

になるが、しかもその挙句、著者の「表象に関する最後の規定性へ移ろう」という呼びかけ一つで、ただちにまた、もとの地点に駆けもどらねばならないのである。

最後に、右のこととも深く関連するわけであるが、紙数が徒らに多く費された観があるということをも、指摘しておきたい。ここで特に挙げるのは、八—一五頁以下に於ける「付録」の部分である。そこには「付録Ⅰ」としてグロククナー版の、「付録Ⅱ」としてラッソン版の、それぞれ講義の総目次が掲げられている。既述のようなテキスト問題の現状からいって、両版の構成が読者に分かりやすく具体的に示されるということ自体は、まことに望ましい。問題は、付録Ⅰが八—一五—一八九頁、付録Ⅱが八二〇—八二九頁という具合に、両方が別々に掲げられているという点に存する。総目次という形で全体の構成を通覧する場合、読者の興味は当然、両版の対比ということに向けられる。既述のとおり、緒論に続いて本論を三部に区分するという全体の構成に関しては、両版は一致している。だから、本書の付録の部分に二段組みにして、上段にグロククナー版、下段にラッソン版という具合に対照表的性格を備えたものとするのは、造作ない筈であつて、かつ、そうすることが、読者に対する確な親切心の表明というものである。これは一見些細なことながら、テキスト問題に関して、既述のとおり著者がきわめて正当な態度をとっているだけに、この点今一つの配慮があつたならと、惜しまれるのである。

以上、筆者は、自らの読解力の至らなさを棚に上げて、思い

つくままの論評を記してきた。最後にもう一度くり返すならば、本書は、ヘーゲル宗教哲学の研究という分野に於て、先駆的開拓的業績として、熟読さるべき・きわめて高い価値を有している。本書が刺激となつて、わが国に於けるこの分野の研究が、

画期的躍進を遂げることを、筆者もまた、宗教哲学の一学徒として、心から願うものである。

(筆者) ひみ・きよし 奈良県立短期大学

(了)
〔哲学〕助教授)

告 諭 文 論 号 次	
曼荼羅の構成……………	清水善三
——その二——	
真理への意志……………	圓増治之
——近世哲学に於けるその内的変動——	
デカルトにおける意志の問題……………	安藤正人
——意志と <i>indifferentia</i> ——	
トマス倫理想の基礎……………	中村治
——至福への本性的欲求について——	
〔資料〕西田幾多郎全集未収載遺稿(完)	
〔討論〕田村均氏の書評に答う……………	神野慧一郎